神経難病看護における看護師の苦悩と看護管理のあり方

～Nursing management of Nanbyo care～

鈴木 三和[1)]　杉戸 和子[1)]　大野 雅志[1)]　髙橋 陽子[1)]　美原 盤[2)]

1)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 看護部

2)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 神経内科

[目的]当院は急性期病棟、回復期病棟、障害者病棟を有するケアミックスの神経疾患専門病院である。障害者病棟の運営方針は神経難病患者のレスパイトケアの受け入れであり、年間のレスパイトケア目的入院患者数は 129 人、延べ人数 421 人、1 入院あたりの在院日数は約 20 日である。神経難病患者には看護師へのケアに対する要望が多く、さらに、日常生活ケアに大きな労力を要する場合が多く、現場の看護師のストレスは大きい。その結果、当該病棟から離職してしまう看護師は他の病棟と比較し多いと感じられた。そこで今回、その実態を調査し看護管理のあり方について検討した。

[方法]過去 3 年間の病棟別離職看護師数、離職看護師の背景を調査した。さらに、当該病棟から離職予定の看護師と面談し離職理由を検討した。

[結果]過去 3 年間の離職者数は、障害者病棟(45 床)11 名、急性期病棟(45 床)10 名、回復期病棟(99 床)4 名であった。障害者病棟からの離職者の平均年齢は 33.5 歳、臨床経験は 8.7 年、当該病棟勤務は 6.9 年であった。一方、急性期病棟の離職者は、年齢 34.6 歳、臨床経験 13.1 年、当該病棟勤務 3.6 年であった。障害者病棟からの離職理由は「看護師扱いされていない」「患者優先とすることがきつい」「他の患者のニードにタイムリーに対応できない」「症状緩和がスムーズにできない」など、患者との関わりの中で抱く苦悩が多かった。

[結論]障害者病棟から離職する看護師は、急性期病棟と比較し、当該病棟での勤務期間が長いスタッフが多かった。離職理由としては、神経難病という進行性疾患と向き合う精神的苦痛(情緒的消耗感・脱人格化・個人的達成感の低下)によるものが特徴的であった。また、ケアの不明瞭さや仕事の量的負荷も看護師の苦悩に繋がっている。以上より障害者病棟管理においては個々の看護師に対する精神的なサポート、ケアの可視化、標

準化に取り組むことが重要である。